

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520611

研究課題名(和文)文章展開機能を重視した日本語上級学習者の作文教育

研究課題名(英文)Teaching Japanese Writing to Advanced Learners: Focus on Discourse Function

研究代表者

木戸 光子(KIDO, Mitsuko)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：20282288

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円、(間接経費) 1,050,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では日本語作文における文型の文章展開機能について分析した。文型辞典や作文教科書に「文型」として抽出された言語形式について、作成した作文データベースを基に「文型」の使用頻度による使用状況を調べた。文型の使用頻度によって高頻度で使用される「基本文型」と低頻度であっても使用可能な「発展文型」という2種類の文型に分類した。日本語習熟度による初級・中級・上級といったレベル別の文型の分類ではなく、目標とする文章作成のための重要性に基づく文型の分類を提案した。

研究成果の概要(英文)：In the research, I analyzed the functions of sentence patterns in Japanese compositions. I examined the frequency of grammatical patterns extracted from three dictionaries of Japanese sentence patterns and four composition textbooks in essays written by university students. These sentence patterns were then classified as "basic" or "developmental," depending on frequency of use. I suggest a classification framework based not on achievement level (i.e., elementary, intermediate, advanced, etc.), but rather on the importance for sentence construction according to the frequency of sentence type. Moreover, I specified qualitatively sentence patterns expressing cause and reason. Even in cases where identical sentence patterns are used, a skew may be observed in usage according to genre, theme, and discourse structure, and tendencies in positioning within the composition. I explore the possibility of describing the meanings of the sentence patterns based on these points.

研究分野：日本語教育

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：文章構造 文型 作文教育 上級日本語学習者 文章展開機能

1. 研究開始当初の背景

日本の大学および大学院で学ぶ日本語学習者にとって答案・レポート・論文を日本語で書くことは学術的活動を行う上で重要である。しかし、学習者がそのような学術的活動上の作文を行うにあたり、頭の中にある概念を日本語で言語化する際に、文章の中で最適な文法と語彙を選択し使用する過程を支援するような作文教材はまだ研究開発が不十分である。そこで、場面や文脈における文章展開機能を明らかにし、日本語学習者と日本語母語話者の作文の構造分析、およびコーパス等から得られた説明文や意見文の構造分析を行った上で、上級学習者対象の作文教材の開発を行うことが必要である。

文章展開機能とは複数の文が意味のまとまりを持つように関連づける機能で、接続詞等の特定の文法的な言語形式が担っている。文構造を解明する文法論の品詞では接続詞の他に指示詞がこれにあたる。一方、文章構造を解明する文章論では、語以上の大きい単位を見ることによって文章が形作られていく条件を明らかにするので、文末のモダリティ形式なども含める。

文章作成を支援するために、文章展開機能に着目して、複数の文が意味のまとまりを成す条件を解明し、場面や文脈に適した文法的な言語形式の選択の条件を明らかにすることが重要である。

2. 研究の目的

本研究では、文章展開機能による文章構造分析を応用して、上級日本語学習者のための作文教材を開発することを目的とした。以下の1)~3)のように、文章論の理論と分析方法に基づき、場面や文脈における文章展開機能を担う言語形式に着目し、日本語学習者および日本語母語話者の文章の構造分析を行う。その成果をもって上級学習者の大学での学術的活動のための作文教材を開発することを目指した。

- 1) 「頻度」「分布」「連鎖」「配列」「接続」という観点から接続詞や文末のモダリティ形式などの文法的な言語形式の持つ文章展開機能を解明する
- 2) 書き手の立場や文章ジャンルの相違による文法的な言語形式の選択から文章展開機能を解明する
- 3) 文章展開機能に基づく上級学習者対象の作文教材の開発を行う

3. 研究の方法

研究の目的に挙げた1)と2)については、作文データベースの完成、および文型辞典に

基づく文型リストの作成、文型リストにある文型の日本語母語話者の作文での使用状況の分析を行った。文型辞典3種と作文教科書4種の文型抽出と比較リストからなる文型リストの作成、および連鎖・接続・配列に関わる文型の抽出、それらの文型の作文での使用頻度の分析を行った。

(1) 作文データベース

日本人大学生の作文データ

日本の大学の商学部1年生対象の2000年度前期の「文章表現」の授業の課題作文である。受講者から研究協力の承諾書を得た30名分の作文からなる。なお、全33名の提供者のうち3名は留学生のため今回の集計からは除いた。課題作文は以下の7種である。これらの7種の作文について作文データベースを作成し、文型リストに従って文型認定を行った。

- 1) エッセイ: 「()と私」というテーマで自分と何か、または誰かについて思ったことを書くという自由作文で、英語圏のessayではなく日本語の随筆に近い文章
- 2) 意見文: 「4月入学と9月入学とどちらのほうがいいか」というテーマの意見文。
- 3) 要約文: サンリオのキティについての開発秘話の新聞記事について、頭括型と尾括型という2種の構成で書かれた要約文。
- 4) 手紙文: 学生から教師へ事情説明をする手紙文。
- 5) 短作文: 『ケーススタディ日本語の文章談話』(寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編、おうふう、1990年)の中の段落の構成を学習して、同じ構成を用いて異なる内容で書いた作文。
- 6) 中間レポート: 「()をどのように利用すべきか」というテーマの中間レポートで、序論・本論・結論の構成のレポート。
- 7) 期末レポート 日本人の言葉遣いをテーマに、文化庁の言葉使いに関するデータをもとに説明し・意見を書くという期末レポート。

日本語上級学習者の留学生の作文データ

2005年から2010年にかけて作文授業で研究協力として承諾を得て収集した課題作文について210名分を収集し、作文データベースを作成した。当初の予定ではデータ数を限って作文データベースを作成することにしていたが、作文データ数を増やすことを優先したため、今回の研究では分析途上で終わった。これらの作文データベースを用いた調査分析は今後の課題である。

(2) 文型データ

学習者の文型使用を念頭において、学習項目として文型辞典と作文教科書で取り上げられた文型を収集した。実際に書かれた作文において認定者による文型認定作業から文型の作文への使用状況を調査した。機械的な

認定ではなく、人手による認定にしたのは、学習者が文型を理解し表現するという言語活動を体験し、各文型の認定の難易度を検証する過程で起こる問題点を探るためである。

文型の収集対象としたのは、以下の日本語教育の文型辞典3種、および中上級日本語学習者対象の作文教科書4種の計7種の教材である。いずれも日本語教育において一定の評価を得ている代表的な文型辞典・作文教科書として様々な教育機関で使用されている。

A．文型辞典3種

- 1) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』グループ・ジャマシイ編、1998年第1刷、くろしお出版
- 2) 『どんな時どう使う日本語表現文型辞典』友松悦子・宮本淳・和栗雅子著、2007年初版第2刷、アルク
- 3) 『日本語誤用辞典外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導ポイント』市川保子編、2010年初版第1刷、スリーエーネットワーク

B．作文教科書4種

- 4) 『留学生のための論理的な文章の書き方』二通信子・佐藤不二子著、2003年改訂版第1刷(初版2000年)スリーエーネットワーク
- 5) 『小論文への12のステップ』友松悦子著、2011年第4刷(初版2008年)スリーエーネットワーク
- 6) 『大学生と留学生のための論文ワークブック』浜田麻里・平尾得子・由井紀久子著、2003年第10刷(初版1997年)くろしお出版
- 7) 『大学・大学院留学生の日本語論文作成編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編、2010年第10刷(初版2002年)アルク

4．研究成果

本研究では、文章展開機能を有すると考えられる言語形式を抽出するために、日本語の文型辞典や作文教科書で学習項目とされる文型について、日本語学習者が作文を書くための文型の必要性を検証し、作文に必要な表現としての文型のあり方を検討することを目的とした。文型は、文型辞典や作文教科書の学習項目として意味用法や例とともに記述される。しかし、実際に作文や読解などの授業で取り上げる場合、それぞれの文型について必ずしも学習者にとって運用しやすいものではない。コーパス研究の使用頻度に注目した文型抽出だけではなく、学習者から見て文型の使用や理解のしやすさを考慮した研究も必要である。

そこで、文章作成に必要な文型という観点から作文における文型使用のあり方に焦点を当て、まず、文型を文章の中での使用に戻

した場合について学習者の文型の捉え方を以下の(1)のように検証した。次に、文型の作文学習への有効性を(2)と(3)のように検証した。

(1)日本語上級学習者の文型の捉え方 - 日本語学習者から見た文型の難易度

グループジャマシイ編『教師と学習者のための日本語文型辞典』をもとに、作文作成に必要な文型の抽出と記述の基礎研究として、中国人日本語上級学習者が中上級学習者の作文を対象に、文型認定を行った。文型機能の認定基準とする「意味・機能別項目リスト」(pp.683-693)161項目全1212文型に、新たに10項目を加えて作成した。方法としては、文型の意味・機能に対する捉え方を中国人上級学習者4名による文型認定を行い、文型辞典の記述との不一致を把握し、そのような不一致の原因を考察した。日本の大学の留学生センターで日本語コースを受講する中上級学習者によって書かれた400字作文「大学進学目的」計189例を対象とした。文型認定の方法としては、個人認定を2回を行い、その後グループ認定を行った。以上の方法で収集した文型認定の結果をレベル別に整理し、各レベルの学習者が使用した文型と未使用文型にまとめた。そして、文型の意味・機能認定上に生じた意見の相違であるゆれを整理してリストを作成・分類し、学習者の「文型」についての捉え方を検証した。

意味・機能との捉え方の相違の観点から文型認定上のゆれは4種に分けられた。

A タイプ：同一形式の異なる機能による認定のゆれ 154例

B タイプ：類似形式による機能認定のゆれ 64例

C タイプ：表現形式の認定による機能認定のゆれ 25例

D タイプ：理解者の誤用による認定のゆれ 2例

個人認定とグループ認定の結果、AタイプとBタイプは表現形式を認定した上の意味・機能の捉え方におけるゆれのタイプであるのに対し、CタイプとDタイプは表現形式自体の捉え方による意味・機能の認定のゆれであることがわかった。ゆれが生じる原因はおもに、文型に関する記述、認定者の捉え方の相違、表現主体の表現、という三つの面から考えられる。

Aタイプは にあたる。『文型辞典』の意味・機能に関する記述や機能名は学習者の捉え方とは一致しないことがある。記述側としては、意味・機能を文法的に分析して記述しているのに対し、学習者の認定は、提題表現、文末表現、語彙の意味など形態的な要素の影響を受けながら、意味的に捉える傾向がある。また、学習者にとって、詳細な文法的記述は、類似表現と比較する場合にしか注目しない

傾向がある。

BタイプとCタイプは にあたり、Bは類似形式による意味・機能の認定のゆれであり、Cは形式の認定の相違による意味・機能認定のゆれである。どちらも認定者の捉え方によるものである。文型認定の作業において、文型リストの形式を重視して認定を行うべきか、文脈の意味を重視して認定するべきかという迷いを認定者が常に抱え、その迷いがそのまま文型認定の結果に反映されている。

しかし、Cの文型の形式の捉え方の相違から、言語表現を理解して意味・機能を認定する場合、文脈理解に支障がない限り、認定者が文型の形式より文脈の意味を重視していることが分かった。グループ認定作業では、形式中心の意味・機能の認定であっても、作文の中での文脈を捉えながら意味・機能を認定していくという傾向が見られた。

以上、学習者による作文における文型辞典の文型の認定を通して、学習者が文型を理解する場合、文型の意味機能名の影響を受けること、さらには過去に学習した文型辞典以外の文法知識の影響を受けることがわかった。また、学習者が文型の形式より、語彙の意味、文末との呼応、文脈などを考慮して認定していることも明らかになった。このことから、作文など学習者の運用に有用な文型理解のためには、学習者の学習過程、および文脈における文型運用のための知識の体系化が必要であると考えられる。

つまり、上級学習者の文型使用認定については、学習者はまずは形式を手がかりとすること、機能の認定は上級学習者でも困難な場合がある。文型認定には機能面より形態面から認定し、機能の認定は特に複数の機能を持つ言語形式についてどの機能に該当するかを認定するのが困難な言語形式がある。例えば、日本語教育が専門の大学院生である上級学習者にも、作文の一部として使用された名詞修飾節にある「という」や条件節にある「と」「ば」「たら」等の機能の認定は難しかった。

(2) 日本人大学生の作文の文型使用状況 - 汎ジャンルと特定ジャンルの文型である基本文型と発展文型の存在

日本語母語話者の大学生の作文の文型使用状況について、『日本語文型辞典』(グループジャマシイ 1998)を基に文型リストを作成し、大学生がレポートとエッセイという作文2種で使用した文型を認定した。その結果、特定のジャンルに使用される文型とジャンルを超えて使用される文型の存在が明らかになった。このような汎ジャンルの文型は作文の基本文型となると考えられる。一方、特定ジャンルのみに見られる文型は作文の発展文型として基本文型と区別したほうがよいと考える。つまり、文型使用に作文の種類によって偏りがある一方、双方ともに使用頻度が高い文型があることから、どの作文にも必

要な基礎となる文型があることが考えられる。

作文における文型の使用頻度の全体的な傾向を見るために、課題作文のレポートと自由作文のエッセイについて文型辞典に基づく意味機能別リストの全 1213 文型について作文での使用状況を調べた。調査対象とした作文データは、2000年に日本の大学の商学部1年生に筆者が担当した文章表現の授業で収集した30名のものである。ただし、欠席のため作文未提出の場合もある。本研究の分析対象はこのうち、「～をどのように利用すべきか」という題の課題作文のレポート28例、および、「～と私」という題の自由作文のエッセイ33例である。文型辞典の文型は、『教師と学習者のための日本語文型辞典』(グループジャマシイ編、くろしお出版、1998年)にある中上級日本語文型161項目に基づいて作成した意味機能別リストの全1213文型を対象とした。また、作文教科書の文型は、『大学・大学院留学生の日本語論文作成編』(アカデミック・ジャパニーズ研究会編、アルク、2005年)の全180文型を対象とした。なお、上述の文型辞典と作文教科書の双方に共通する文型は66文型であった。文型の意味・機能の分類は上記の文型辞典と作文教科書の記述に従った。以上の作文と文型を対象に、作文の文型認定を行った。

日本人大学生と留学生の使用文型数を集計した結果、日本人大学生の作文では文型辞典の全文型の20%前後のみ作文に使用されていることがわかった。逆に、約80%は未使用である。参考までに留学生の作文3例の文型使用数は10%以下である。

レポートとエッセイに共通する「基本文型」としては、次の文型が挙げられる。

「も」(付加)、「や」(列挙)、「など」(例示)、「から」(起点・由来)、「しかし」(逆接)、「ような」(例示)、「たら」(仮定条件)、「ので」(理由)、「だけ」(限定)、「から」(理由)、「ても」(逆接条件)、「たとき」(時点)、「また」(列挙)、「もちろん」(期待肯定)

列挙「も、や、また」、例示「など、ような」、理由「ので、から」は項目が複数あり、よく使われている。接続語句では「しかし」「また」といった接続詞、「たら」「ても」のような接続助詞も見られる。なお、使用頻度の高い文末表現は見られない。

レポートの「基本文型」については、文末表現の「べき(だ)」(当為)が多く見られるが、これは作文のテーマの影響も考えられる。次いで、「のです」(説明・理由)、「ることができる」(可能性・不可能・能力)、「だろう」(推量)の使用頻度が高い。共通の「基本文型」には文末表現は見られなかったが、レポートでは複数の文末表現が「基本文型」として挙げられる。助詞相当句では「とは」(話題)、「について」(対象)、「として」(立場)、「において」(場面)、接続語句では「また」

(不可)「ば」(仮定条件)「たとえば」(たり~たりする)(例示)「ため」(のため)(原因・理由)が挙げられる。つまり、あるテーマを設定して説明・解説を加えるというレポートの文章の特性から、主張や説明の文末表現が多く、助詞相当句でも話題や対象を表すものが多く出現すると推察される。

エッセーの「基本文型」については、逆接「が」の使用頻度が高く、共通の「基本文型」の「しかし」も多く見られた。また、前置きの「が」が見られることも特徴的である。レポートでは立場は「として」の使用頻度が高いのに対し、エッセーでは「にとつて」のほうが高かった。「てくれる」(受益)「とても」(程度・強調)「ても」(逆接)のような、主観的な表現、口語的な表現が見られる。このような文型の使用頻度が高いのは、エッセーではレポートのような論理性を重視する文章とは異なり、筆者の感情のような主観を表現できる文章であり、さらに文体も筆者個人の文体が影響していると考えられる。

レポートとエッセーに共通する「発展文型」としては、次の文型が挙げられる。

「たとき」(時点)「なら(ば)」(仮定条件)「かもしれない」(推量)「れない」(可能性・不可能)

レポートの「発展文型」としては次のとおりである。

「によって」(手段・方法)「ば」「と」(前置き)「てから」(前後関係)「したがって」(推論)「ではなく」(訂正)「すぐ」「すぐに」(短時間)「じゅう」(空間的關係)など

エッセーの「発展文型」としては次の文末表現や助詞相当句が挙げられる。

文末表現の「のだ」(説明・理由)「たことがある」(経験)「のか」(質問)「ほど」(程度)「から...まで」(範囲)「まで」(程度・強調)「より(も)」(対比・比較)「なにか」(不明確)など

「発展文型」に関しても「基本文型」と同じくレポートとエッセーのそれぞれの文章の特性が文型の使用頻度にも反映していると考えられる。レポートでは論理関係を示す表現や感情を交えず客観的に事実や意見を述べる表現が見られる。それに対して、エッセーでは自分のことを語る主観的な表現が見られる。

(3)文型辞典と作文教科書の文型抽出と文型の文章構造での位置づけ・接続・連鎖・配列に関わる文型の特定

日本語教育の文型辞典および作文教科書に取り上げられた文型の集計と照合については、文型辞典3種、および作文教科書4種に共通して取り上げられているかを照合した。文型辞典が品詞を中心として文型を抽出しているのに対し、作文教科書は複数の品詞を担う単語を組み合わせて文型を抽出して

いる。抽出された文型を文章全体の構造の中で位置づけるために、接続や連鎖、配列の関係性からの観点から作文の文型認定には必要である。

さらに、作文に使用された文型と文章構造との関係を探るために、大学生のレポート形式で書かれた作文を対象として、原因・理由を表す文型の中から作文教育に必要な文型を特定した。今回の調査から、レポート形式の作文の原因・理由の「基本文型」は「ため」、「から」、「ので」であり、「発展文型」は「によって」、「による」、「というのは」、「そこで」であることがわかった。

また、配列に注目することによって、出現位置の傾向および文型使用の偏りの要因についても考察した。まず、原因・理由の基本文型や発展文型は主として文章の中間部において使用されているという傾向が見られた。その一方で「そこで」のように開始部のみに現れる文型もあることがわかった。

次に、基本文型であってもテーマによって使用頻度の高低があることや、発展文型の場合ではあるテーマに使用が集中する文型と、どのテーマにおいても少数ではあるが使用されている文型がある。こうした文型使用の偏りの要因には「ジャンル」、「テーマ」、「文章の構成」があることがわかった。

参考までに「から」の変異形とみられる「ことから」についてはレポートで使用される傾向がある一方、日本語上級学習者の留学生の作文データベースでは使用例が少ない。作文教科書で取り上げられる言語形式の中で、特定ジャンルの文章で現れる形式にもかかわらず、その重要性があまり強調されていない形式が存在する。このような形式は特定ジャンルの作文で基本文型として必要とされることを作文教育ではもっと強調すべきだと考える。

このように、配列という観点から原因・理由の基本文型と発展文型を捉えなおすと、文章構造と文型との関係が浮かび上がってくる。この調査では配列的観点から文型を捉え直す試みの一端を示した。

なお、作文データベースと文型抽出は当初計画より量を拡大したこともあり、予定していた作文教材開発までは至らなかった。とはいえ、教材開発のための文型抽出、作文データベース作成、上級日本語学習者による作文の文型認定、という教材開発のための基礎データは収集することができた。これらの作文データベースの一部は研究成果報告書として印刷し、日本語教育の研究者に配布した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

木戸光子・湯本かほり、意味機能別文型

から見た大学生の作文の文型使用傾向、筑波大学留学生センター日本語教育論集、査読有、第 28 号、2013、333-350
王金博・木戸光子、日本語上級学習者による作文の文型認定、筑波大学留学生センター日本語教育論集、査読有、第 28 号、2013、23-41
湯本かほり・木戸光子、大学生のレポートにおける原因・理由を表す文型について - 作文教育への応用を目指して -、筑波大学留学生センター日本語教育論集、査読有、第 29 号、2014、43-57

〔学会発表〕(計 2 件)

木戸光子・湯本かほり、大学生はレポートでどのような文型を用いているか - 日本語文型辞典に基づく意味機能別リストからみた文型使用傾向 -、ポスター発表、日本語教育国際研究大会(ICJLE2012)、2012 年 8 月 18 日、名古屋大学

王金博・木戸光子、日本語上級学習者は作文の文型をどのようにとらえているか 文型辞典の意味・機能別リストによる中国人上級学習者の文型認定を通して、ポスター発表、日本語教育国際研究大会(ICJLE2012)、2012 年 8 月 18 日、名古屋大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木戸 光子 (KIDO, Mitsuko)
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：20282288

(2) 研究協力者 (WANG, Jinbo)

王 金博
筑波大学・大学院人文社会科学研究科国際
日本研究専攻・大学院生

湯本 かほり (YUMOTO, Kahori)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科文芸
言語専攻・大学院生